

＝ 卷頭文 ＝

経済・物価が動く時代

片桐 大地

日本銀行広島支店長



仕事柄、企業の経営者の方々と話をする機会が多いのですが、企業の規模や業種を問わず、ここ数年でビジネス環境が一変したと聞きます。数年前までは、仕入価格や販売価格、従業員の賃金も大きく変わらないことを前提にできましたが、今は、年々コストが上昇することが前提になったとのことです。

日本経済にこうした変化の兆しを感じるようになった3年前、地方のある老舗中小企業の経営者の方に、「経済・物価が殆ど動かない時代」と「動く時代」のどちらがよいか訊ねたことがあります。するとすぐに、「動く方だ。失われた時代の経営者はコストカットだけ考えれば何とかなったが、経済のダイナミズムの下では、経営者は様々なことを考える必要がある。経営者冥利に尽きると思わないか」と返ってきました。

日本全体が深刻な人手不足となる中、人件費や、人件費の影響を受けやすいサービス価格はこの先も上昇する可能性が高いと思われる。商品価格も、世界で起きる様々な供給

要因などから、上昇を繰り返しています。そうした環境下では、企業は、コストの継続的な上昇を見越して収益を増やす必要があり、守りに徹する戦略は、以前よりリスクを伴うことになります。今や持続可能なビジネスは、今の事業をそのままの形で継続することでは必ずしもなく、人や設備への投資を戦略的にを行い、付加価値を高めたりビジネスの規模や範囲を拡大したりすることで、収益を増やしていけるビジネスと言えます。

いずれにせよ、経営者の方々の考え方や戦略が、これまで以上に重要な時代になったと感じます。「経営環境が厳しい」と捉えるか、「経営者冥利に尽きる」と捉えるか。企業に置かれた状況は様々ですが、一つ言えることは、人手不足の時代、従業員は貴重な経営資源であり、従業員の企業に対するエンゲージメントを高めることが求められています。広島にエンゲージメントが高い企業が増えれば、その分、若者の流出の抑制にも繋がるはず。